

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

March 2022 3

0年目の常滑市役所と、15年目の飛香台

あすかだい





 常滑市役所  
TOKONAME CITY HALL

# 0年目の常滑市役所と 15年目の飛香台 あすかだい

前々回のとこなめ陶の森資料館、前回のアミューズメント系三施設に続く  
常滑のリニューアル・ニューオープン紹介企画第三弾は、  
年明けに業務を開始した市役所新庁舎だ。  
わが町の“新しい顔”は、いったいどんな施設だろうか。



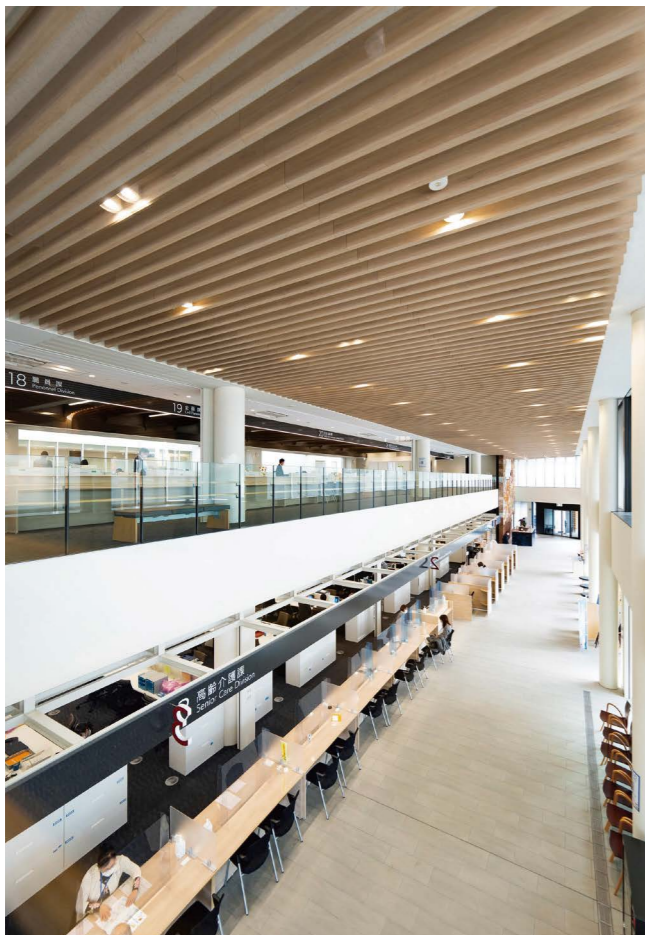
ているのが面白い。病院と市役所がこのような形で肩を並べているのは、全国的に見てもほとんど例はないだろう。起伏のある地形の妙味が活かされ、周囲に広がる新しい町の風景とも調和し、地域全体にのびやかな風景を作り出している。

庁舎内に入る前に見ておきたいのが、病院との連絡通路に設置されたスクラッチタイルとテラコッタ（建築装飾用陶器）の壁だ。これらは、常滑焼が飛躍的な発展を遂げるきっかけになった製品として知られる建築陶器で、やきものの町らしい演出である。スクラッチタイルは「甕れ!! 黄色い煉瓦」と題したプロジェクトにより、一六四〇人の市民が制作に参加しており、それぞれに制作者の名前やイラスト、メッセージなどが刻まれている。やわらかな土の風合いが美しいその壁には、シルバーマトリックな「常滑市役所」と市章のサインが燦然と輝いている。画家・杉本健吉の手による秀逸なデザインの常滑市章は、窓ガラスや掲示板など市庁舎のあちこち

にあしらわれているので、ぜひ探してみてほしい。

館内に入ると、受付の背後で巨大な陶壁が迎え入れてくれる。近年は公共施設に陶壁が使用されることも少なくなっているようだが、常滑でこれを外すわけにはいくまい。これは、陶壁の技術継承を目的に掲げた「陶壁でつなぐプロジェクト」により制作されたもの。陶壁制作の経験者と若手が組んだチームでの参加を条件にした公募で、水野製陶園の水野吉興さん・太史さんの案が採択された。通路と陶壁のほかに、新庁舎には常滑焼の建築資材が多用されており、市外から訪れた人に「さすが千年続くやきもの町」と感じてもらえるのではないだろうか。

受付付近からの眺めはなかなか壮観だ。広々としたフロアの奥まで見渡すことができ、南側の大きな窓からは明るい光が差し込んでくる。圧迫感も薄暗さもまったく感じさせない、快適で心地よい空間が広がっている。この階に集まっている



のは市民の利用頻度が高い部署で、それらが回廊状にレイアウトされている。各窓口には大きなピクトサインが設置されているので目的が見つけやすい。また、通路の幅にゆとりがある点も好印象だ。

新庁舎の目玉のひとつは、一階に設けられた「こども図書室」だ。館内は快適であたたかみがあり、子育て世代の意見を反映して授乳室や親子トイレが隣接されている。オープンにあたって蔵書が大幅に

補充されたというのも嬉しい。

**山林から「飛香台」へ**

ところで所在地の飛香台は、今年度が誕生からちょうど十五年目である。せっかくなので飛香台の成り立ちも紹介しておきたい。

もともと飛香台の一带は標高約二〇メートルから五〇メートルのなだらかな丘陵地だった。古くから人家はほとんどなく、人間国宝山



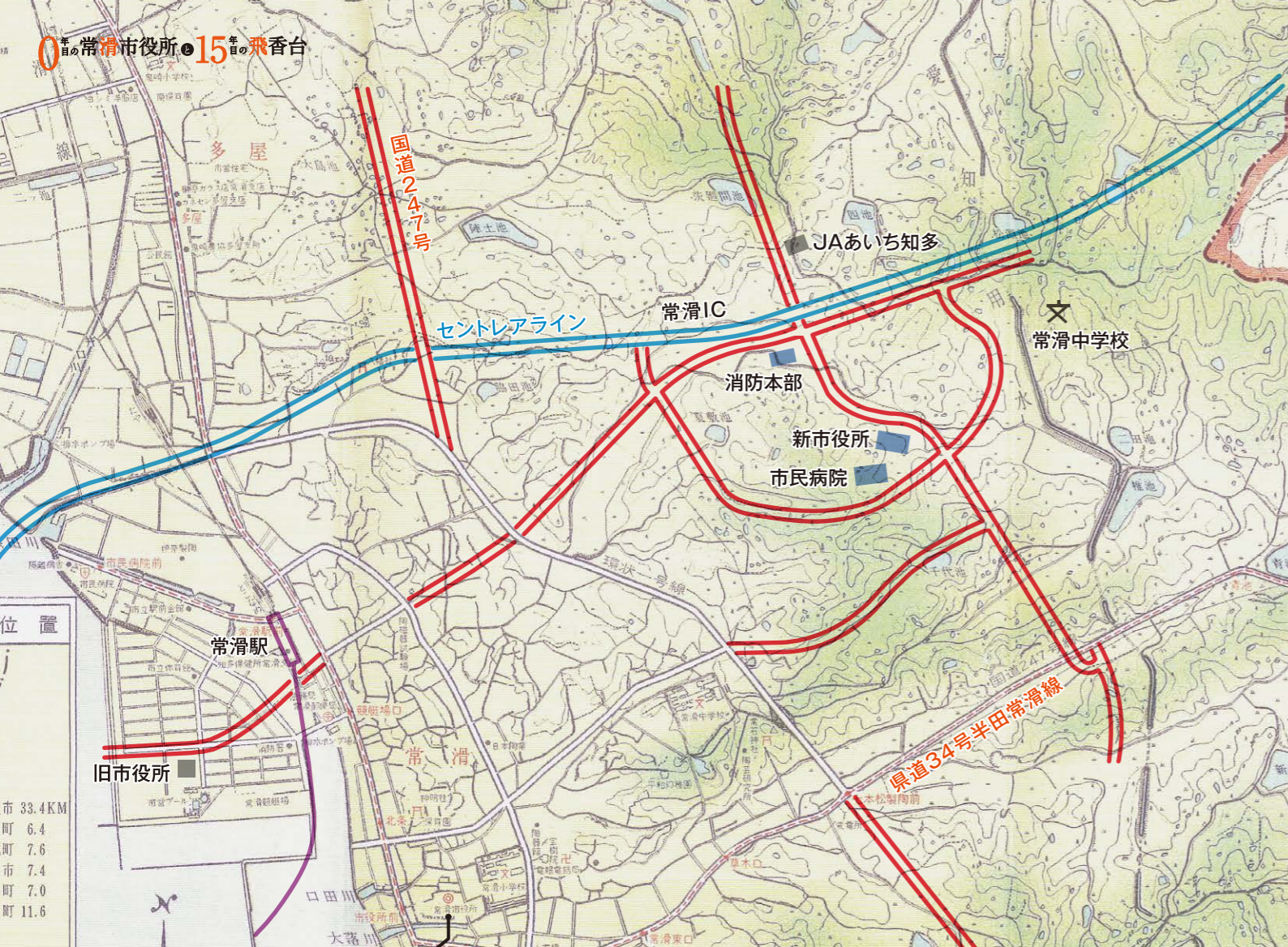
多くの市民が意見を出し合った市庁舎が、今、動き出す。

ようこそ新庁舎へ！

丘陵地に開かれた新しい町・飛香台の真ん中に、この一月四日、ついに新しい常滑市役所が開庁した。昭和四十四年（一九六九）から五十三年もの長きにわたって親しまれてきた旧庁舎はその役目を終え、これからは飛香台の新庁舎が常滑市の顔となる。所在地は、平成二十七年（二〇一五）に鯉江本町から移転した常滑市民病院の隣接地。建物は、県内の市庁舎では比較的低層の三階建て。市役所というところが大ぶりな建物であることが多いが、威圧感のないすっきりとした外観は、どこか若々しくもある。屋上に突き出した円形議場の上部が良いアクセントだ。

一段高いところに病院があり、病院玄関から伸びる屋根付きの連絡通路が新庁舎の二階玄関とフラットに繋がっている。両者は完全に別の建物ではあるが、行き来のしやすさと統一感のある色調によって、まるできょうだいのような存在になっている。





位置

市	33.4 KM
町	6.4
町	7.6
市	7.4
町	7.0
町	11.6

飛香台開発以前の地図に現在の主要道路・施設を重ねてみた。「環状一号线」は現在の国道247号の一部、地図中央の「常滑中学校」は現在の常滑東小学校である。  
(昭和41年発行「常滑市商工観光案内図」より一部抜粋)



平成25年(2013)に撮影された飛香台一帯の航空写真。



JAあいち知多(アグリス)総合本部から見た開発中の飛香台。右端では消防本部が建設中。画面中央の草むした空き地が、市民病院と市役所が建つ場所。  
(写真提供:常滑市都市計画課 ※航空写真も)

田常山(たながやま)の「常山窯」や数軒の製陶所があった程度で、平成以前には、この一帯を宅地開発しようという具体的な計画は存在しなかった。そんな土地が開発されることになったのは三十数年前、セントレアのプロジェクトが動き始めてからである。

平成元年(一九八九)、新空港が常滑沖に建設することが東海三県知事と名古屋市長によって合意される。この時から空港建設に向けた動きが加速し、常滑市でも開港を見据えた地域整備が検討されるようになる。具体案が市民に提示されたのは、平成六年(一九九四)の広報とこなめに掲載された「中部新国際空港に関連した地域整備基本計画方針(案)」が最初。ここで八つの主要事業が打ち出され、その一つに「ニュータウンの開発整備」があった。

そこでは、ニュータウン建設予定地として、常滑地区、荻屋・檜原地区、坂井地区が挙げられた。このうち、現在の飛香台に相当するのが常滑地区である。通称「常滑ニュータウン」には、中低層住宅を主体に質の高い居住環境を作ることや、総合病院・大学消防本部等を整備することが記され、いかにも九十年代的な表現で「ハイライフトOWN」と謳った。二年後に策定された「こなめ21世紀計画」第3次常滑市総合計画(一九九六～二〇〇五)にも三つのニュータウン建設が盛り込まれるが、最終的に荻屋・檜原と坂井は具体化せず、常滑ニュータウンだけが実現に向かう。

事業開始は平成十三年(二〇〇二)一。エリアの真ん中を南北に貫く道路(新庁舎前の道)をおおよその境に、東地区を市が、西地区を都市基盤整備公団が担当して工事が始まった。平成十七年(二〇〇五)には宅地開発のきっかけを作ったセントレアが開港し、ほぼ同時にセントレアラインも開通。それを横目に造成は急ピッチで進められる。整備にあたっては、環境に配慮した最先端空港として注目を集めたセントレアに同調し、「環境との共生」「景観への配慮」「地域資源の活用」な

どをコンセプトとして提示。地区面積の十パーセント以上の公園・緑地整備、統一感のある色彩ガイドラインの導入、陶磁器くずを再利用したブロックを歩道に使用するなど、最新の都市設計思想や整備技術が駆使された。

土地の造成工事が終盤を迎えた平成十八年(二〇〇六)十一月一日、常滑ニュータウンと仮に呼ばれてきたこの地区に、飛香台という愛称がついた。市民および在勤者を対象とした公募により決まったもので、飛行機にちなんだ「飛」と、緑が多く「四季の香り」に包まれた街ということが名前の由来という。翌年から北条公園(きたじょうこうえん)周辺を皮切りに分譲が開始され、みるみるうちに住居や店舗が建ち並んでいった。

飛香台が愛称から正式な町名になったのは平成二十四年(二〇一二)二月で、この時点では人口二五八九、世帯数八六九を数えた。これが令和三年(二〇二二)末現在では、人口五二二三、世帯数一六一八と十年弱で倍増している。計画当初は、人口

約五〇〇〇、戸数約一六五〇を見込んでいたので、住宅に関しては現段階ではほぼ完成したといっていだらう。また、その間には消防本部と市民病院も開設されている。

そして、このたび完成した新庁舎こそ、飛香台の最後のピースなのである。

**市民に親しまれる存在として**

市役所が移転されることになった経緯は、昨年1月号の特集「今、見ておきたい常滑市役所」で触れたので、ここでは簡単に説明しておくとして、きっかけは旧市庁舎の耐震問題である。老朽化が進んでいた旧庁舎は、一定の耐震工事を施しても大型地震が発生した場合には業務継続が難しく、それをクリアするレベルの耐震工事をするとすると巨額の費用がかかる。ならば、津波や液状化の恐れがない内陸部の高台に、災害に強い新庁舎を建ての方が、防災の観点からも予算の面からも合理的で市民の理解も得



市民の安心と安全と、豊かな暮らしを支える拠点が市役所である。



られる、というのが移転した大きな理由だ。

市庁舎の候補地は現在地のほか、飛香台の現常滑市消防本部の西、奥栄町の旧常滑高校、そして泉町の山ノ神グラウンドの三か所が挙がっていた。いずれも、津波による浸水や液状化の影響を受けない市有地もしくは県有地だが、周辺の道路網や公共交通機関によるアクセス、適度な敷地面積、既存施設の撤去などを考慮した結果、市民病院に隣接する現在地が選ばれた。

実は、市民病院も市役所も設計者は同じで、東京に本社がある明治三十三年（一九〇〇）創業の建築会社、日建設計である。全国の市庁舎や複合施設に携わってきた実績を持ち、手掛けた施設や再開発事業は枚挙に暇がない。新庁舎と市民病院が外観も機能も一体化したように感じられるのは、日建設計のデザイン力によるところが大きい。二つの建物とも、優れた企画の提案者に業務を発注する「プロポーザル方式」によって日建設計が選定さ

れているが、その設計案は、両者が一体的に利用できることに主眼が置かれたものだった。

また、施工は地元企業をはじめとする建設会社三社が参画する共同企業体を手掛けたが、設計段階から施工者が技術協力する「ECI発注方式」により、最新のノウハウが取り入れられているという。建築面で最大のポイントは、災害時でも活動が継続できるように免震構造を採用していること。設計を担当した日建設計の荒川康弘さんは「施工・設計・施工者の三位一体で知恵を出し合うチーム常滑」として同じ目標を共有して事業を進めたことが、コロナ禍の厳しい状況にも関わらず、短期間の工期で高機能な市庁舎の実現に繋がりました」と話す。

生まれたばかりの新庁舎は、利用しやすいだけでなく、職員にとってもより働きやすい環境になった。名実ともに市民に寄り添う庁舎として、これから成長していくことだろう。